

## (株)千總ホールディングス所蔵・肉筆小袖雛形類調査報告

共立女子大学博物館学芸員  
石原 ひなの

### はじめに（調査の経緯）

2024年8月6日（火）及び7日（水）に、千總文化研究所において、(株)千總ホールディングス所蔵の肉筆小袖雛形類の学術調査を行った。参加者は筆者（石原）のほか、当館名誉館長の長崎巖、当館学芸員の畑中和花であった。

調査のきっかけは、千總文化研究所より毎年当館にご寄贈いただいていた『千總文化研究所 年報』の第5号<sup>1)</sup>に掲載されていた林春名氏による研究ノート「近代の千總における参考資料収集」、及びコラム「墨書のある小袖雛形本」を拝読し、(株)千總ホールディングスが肉筆小袖雛形類を所蔵していることを知ったことにある。江戸時代の呉服注文において、模様や技法の仕様決定の際にサンプルブックとして用いられた小袖雛形類は、当時の女性の小袖の実態を知る上で非常に重要な資料である。小袖雛形類の中では、板本の小袖雛形本についての研究が比較的進んでいるのに対して、江戸時代後期から明治時代にかけて用いられた肉筆雛形本については、資料の存在が認識され始めてから時間もさほど経っておらず、研究の途上にある。特に、(株)千總ホールディングスが所蔵する肉筆の小袖雛形類については、墨書等の実際の使用の痕跡が残るものや、肉筆雛形本の発生過程を類推する上で貴重な資料が含まれており、調査により研究が大きく前進することが期待された。

調査に参加した3名は、2023年度に徳島市立徳島城博物館において行った徳島藩蜂須賀家伝来染織品の学術調査（悉皆調査）<sup>2)</sup>にも参加しており、当該調査にかかる研究の一環として、江戸時代後期の蜂須賀家の呉服注文関係資料（雛形類を含む）を別途整理していた。また、長崎と筆者は、江戸時代から明治時代に至る雛形類や見本帳類の研究を継続的に行なっている。

上記のような経緯から、千總文化研究所研究員の林春名氏を通して、同研究所及び(株)千總ホールディングスに対して本調査を行わせていただきたい旨を申し出るに至り、ご快諾いただき調査の実現が叶った。

林春名氏には、前述の徳島城博物館での調査時にもご協力いただいた経緯がある。調査のきっかけとなった同研究所年報のご寄贈と併せて、日ごろよりの学術的な御協力に心より感謝申し上げる次第である。

### 凡例

1. 調査では、長崎が個々の資料の種別・体裁・収録されている模様・制作年代・伝来の経緯等についてのコメントを口頭で行い、筆者がそれを記録し、畑中が資料の写真撮影を行った。林春名氏には、資料に関する情報を随時ご教示いただいた。
2. 調査した資料は、全て(株)千總ホールディングス所蔵である。また、本稿に掲載した画像のうち、特に出典の記載のないものは調査時に撮影した資料写真である。
3. 調査の記載項目は、調査番号、資料名、種別、制作年代（時代・時期・世紀）、寸法、体裁（丁数等）、図示形式、墨書や印影、備考などである。表1は、これらの情報を抜粋し整理したものである。
4. 千總で「模様雛形」という名称で管理されている資料には、3帙9冊の資料が含まれていた。「模様雛形 四冊」という題箋が付された帙には、『妻印』・『書印』・『鳥』の3冊が収められていた。同じく「模様雛形 四冊」という題箋が付された別の帙には、『小模様』・『数印』・『楽印』・『霧印』の4冊が収められ、「模様雛形 貳冊」という題箋が付された帙には、『大印新雛形』・『雲印』の2冊が収められていた。各資料に貼付されていた株式会社千總参考館の管理ラベルを見るに、『大印新雛形』は、もとは「模様雛形 四冊」の題箋が貼られ『妻印』・『書印』・『鳥』の3冊が収められていた帙にあったもので、実際に欠失しているのは「模様雛形 貳冊」の帙のうち1冊であると考えられる。  
墨書などの痕跡から、これらの9冊は千總が「鳥谷」という業者から一括で入手したものであると考えられる。帙の振り分けに対する意味付けは特に見受けられなかった。本稿では、「模様雛形」の各帙に収められている資料を一冊ごとに分け、表紙に記されている書名を本稿における資料名称として、それぞれについて調査結果を述べる。
5. 表1及び調査結果では、調査時に採寸した寸法をもとに割り出した判型を記している。現在A4やB5といった判型があるように、和書の冊子本にも、一定の規格による大きさで作られているものがある。判型は書の内容と結びついていることが多いため、分析の一助として記した。判型には、美濃紙の全紙（約27×39cm）を基本にした大本系と、半紙の全紙（約24×33cm）を基

本にした半紙本系の二系統がある<sup>3)</sup>。調査した資料のうち、規格内のものについては、縦長の判型3種と横長の判型2種が確認できた。

最も多く確認できた大本は、美濃紙の全紙を二つ折りにした大きさの本<sup>4)</sup>で、板本では実用書類によく見られる。小袖雛形本は当初半紙本の判型のものが多かったが、宝暦以降には大本に移行した<sup>5)</sup>。調査した肉筆雛形本のほとんどが大本であったのも、小袖雛形本の判型一般を踏襲していることに依ると考えられる。

半紙本は、半紙の全紙を二つ折りにした大きさの本で、談義本や読本、絵本類などに見られる。貞享頃までの小袖雛形本の多くはこの判型であった。

中本は大本を長辺で二等分にした大きさの本で、板本では草双紙・合巻や後期滑稽本・洒落本などに見られる。江戸時代の中でも、特に江戸の地ではこの判型の刊行が盛んであった。

横中本は、中本を横長に使ったもので、板本では地理案内書や紋帳といった実用向きの本によく見られる。

美濃三つ切本は、大本を長辺で三等分した大きさの横長の本で、大本を二等分した中本よりもさらに実用向きの内容が多く見られる。米の相場付や器物の物価表などがこれにあたる。

6. 調査時に確認できた千總の蔵書印を表2にまとめた。同じ印影が複数の資料で確認できたため、本稿では各印影を表2のように表記する。印影に見える表記と、明治・大正期の千總の組織体制の変遷<sup>6)</sup>とを照らし合わせると、各蔵書印の制作・使用時期を絞り込むことができる。これをもとに、各蔵書印を表記するためのアルファベットは、その制作・使用時期の順に合わせて振り分けた。一方で、千總のコレクションの中では、近代に収集された参考資料が大きな割合を占めている<sup>7)</sup>ことから、蔵書印の制作・使用時期と、資料の制作年代とは必ずしも一致しない点に留意されたい。また、千總の組織名ではなく、「西村總左衛門」と当主の名前を記したものについては、時期を絞り込むことができなかった。

## 資料の概要・種別

個々の資料の調査結果について述べる前に、肉筆小袖雛形類の概要について述べておく。

江戸時代における衣服の調達方法は、着用者の経済力に応じて異なっていた。絹織物や上布（苧麻）を生地とする「呉服」を着用する武家の男女及び上層町人の男女については、ほぼ全てが注文生産であった。呉服の受注から制作、納品に至るまでのプロセスもまた、身分及び性別によって異なっていた<sup>8)</sup>。町人女性に限ってみれば、注文の段階で顧客が小袖の模様や地色を決定する上でのサンプルブックとして、小袖雛形本という出版物が用いられていた。小袖雛形本には、主に背面から見た形の小袖形に小袖の模様図が描かれるほか、余白に加飾技法や地色が記されている。呉服商からの貸与や書店での購入といった形で流通した小袖雛形本は、17世紀半ばに出版が始まってから長らく町人女性の呉服注文において実用された。しかし、褌模様・裾模様の流行や、出版業界における構造変化などを背景として、小袖雛形本の出版は次第に衰退していき、19世紀初頭を最後に途絶えることとなった。

小袖雛形本の衰退に伴い、これに代わって町人女性の呉服注文におけるサンプルブックの機能を担うことになったのが、肉筆で小袖の模様を描いた肉筆雛形本である。小袖雛形本の後継資料であることから、体裁についてもこれを引き継いだ部分が多い。小袖形に裾模様や褌模様、あるいは散らし模様を表し、余白に番号を付すのが一般的である。板本である小袖雛形本が書店で販売されていたのに対して、肉筆雛形本は各業者が独自に作成し、顧客に対して貸与する形で用いたもので、早いものでは18世紀半ばにその原型が出現し始め、18世紀末以降には使用が定着した<sup>9)</sup>。また、模様のサンプルを示す肉筆雛形本と併せて、染色した裂によって色のサンプルを示す色見本帳も用いられた。このほか、型染呉服の場合には、肉筆雛形本ではなく型染見本帳が用いられていた。

肉筆雛形本及び見本帳類は、明治時代に入っても引き続き呉服注文に用いられた。しかし、図案における配色の重要性の高まりや、図案家や近代画家による図案考案の活発化などを背景として出現した多色摺りの版本である着物雛形本<sup>10)</sup>は、明治30年代から40年代にかけて刊行が最も盛んになり、これに伴って肉筆雛形本及び見本帳類は次第に姿を消していった。

町人女性の呉服注文におけるサンプルブックは、江戸時代から明治時代中期頃までに、小袖雛形本から肉筆雛形本及び見本帳類という系譜をたどった。一方で、武家女性の呉服注文においては、そのどれとも異なる肉筆の雛形図が用いられていた。これは呉服商が武家身分の顧客のために独自に制作したものであり、呉服商と顧客との間を幾度か往復するやり取りの中で仕様決定の参考とされ、仕様が決定したのちは、制作段階における台帳も兼ねた<sup>11)</sup>。町人女性に用いられたものも武家女性に用いられたものも、どちらも肉筆で描かれた雛形であるという点は共通しているが、前者が複数の顧客に対して使いまわされるものであったのに対し


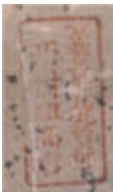



表 1 調査資料リスト

| 本稿での<br>整理番号 | 本稿での名称       | 種別             | 時代                    | 寸法 (縦×横、cm)       | 体裁              | 墨書   | 印影                  |
|--------------|--------------|----------------|-----------------------|-------------------|-----------------|--|---------------------|
| 1            | 『古本墨絵鑑形』     | 肉筆鑑形本 (最初期のもの) | 江戸時代・18世紀半ば           | 24.5×17.5 (半紙本)   | 表・裏表紙+10丁       | 「京都市御倉町 西村総左衛門所蔵」、「此御召雛形何万様へも参り候共早速御戻し可被下候以上寺町三條下ル町一長谷河小店」<br>「近清」 | 千總印F                |
| 2            | 『梅印御召惣模様新鑑形』 | 肉筆鑑形本 (富裕町人向け) | 江戸時代・18世紀第三四半期～19世紀前半 | 27.5×19.5 (大本)    | 表・裏表紙+20丁       |  | 千總印B、D              |
| 3            | 『御所傳鑑形』      | 肉筆鑑形本 (武家向け)   | 江戸時代・18世紀第三四半期～19世紀前半 | 35.3×28.7         | 表・裏表紙+扉1枚+47枚   |  |                     |
| 4            | 『天印模様鑑形』     | 肉筆鑑形本          | 江戸時代・18世紀第三四半期～19世紀前半 | 27.0×19.5 (大本)    | 表・裏表紙+17丁       |  | 千總印B                |
| 5            | 『妻印』         | 肉筆鑑形本          | 江戸時代・19世紀前半           | 26.0×18.8 (大本)    | 表・裏表紙+扉1枚+25丁   | 「京城東 鳥谷本店」、「鳥谷」  | 千總印H、「京都鳥谷所蔵之印章」    |
| 6            | 『小模様』        | 肉筆鑑形本          | 江戸時代・19世紀前半           | 26.7×19.0 (大本)    | 表・裏表紙+25丁       | 「京都 鳥谷染店」  | 千總印H、朱印X、「松蔭」       |
| 7            | 『數印』         | 肉筆鑑形本          | 江戸末～明治時代・19世紀後半       | 26.7×19.0 (大本)    | 表・裏表紙+24丁       | 「京都 鳥谷染店」  | 千總印H、朱印X            |
| 8            | 『書印』         | 肉筆鑑形本          | 江戸末～明治時代・19世紀後半       | 26.0×18.4 (大本)    | 表・裏表紙+26丁       | 「京都 鳥谷染店」  | 千總印H、朱印X            |
| 9            | 『鳥』          | 肉筆鑑形本          | 江戸末～明治時代・19世紀後半       | 25.5×19.0 (大本)    | 表・裏表紙+24丁       | 「阪江店」  | 千總印H、朱印X、「阪江大阪支店印章」 |
| 10           | 『大印新鑑形』      | 肉筆鑑形本          | 明治時代前期・19世紀後半         | 26.5×18.4 (大本)    | 表・裏表紙+24丁       | 「京印 日口日口」  | 千總印H、朱印X、「京都 鳥谷口」   |
| 11           | 『葵印』         | 肉筆鑑形本 (男児向け)   | 明治時代前期～中期・19世紀後半      | 27.2×18.8 (大本)    | 表・裏表紙+46丁       | 「京都 鳥谷染店」  | 千總印H、朱印X            |
| 12           | 『露印』         | 肉筆鑑形本          | 明治時代前期～中期・19世紀後半      | 26.9×18.1 (大本)    | 表・裏表紙+36丁       | 「京都 鳥谷染店」  | 千總印H、朱印X、「扇口」       |
| 13           | 『雲印』         | 肉筆鑑形本          | 明治時代中期・19世紀後半         | 27.0×19.2 (大本)    | 表・裏表紙+49丁       | 「京都 鳥谷店」   | 千總印H、朱印X            |
| 14           | 『松印模様鑑形』     | 肉筆鑑形本          | 明治時代中期・19世紀後半         | 30.0×22.3         | 表・裏表紙+44丁       | 「京都市御倉町 西村総左衛門蔵」、「西京 西村惣右衛門蔵」、「京都市御倉町 西村総左衛門所蔵」                    | 千總印D、E              |
| 15           | 『鶴印色見本』      | 色見本帳           | 明治時代前期・19世紀後半         | 27.5×19.8 (大本)    | 表・裏表紙+扉1枚+13枚   | 「下京第三区御倉町七拾九番邸 西村総右衛門所蔵」   | 千總印D                |
| 16           | 『繪物更紗見本集』    | 肉筆図彙集          | 1876 (明治9) 年          | 8.9×19.5 (美濃三つ切本) | 表・裏表紙+26丁       | 「下京第三区御倉町 西村総左衛門所蔵」、「明治九年夏作口」                                      | 千總印C                |
| 17           | 『鑑形模様』       | 肉筆図彙集          | 明治時代後期・20世紀前半         | 26.4×19.3 (大本)    | 表・裏表紙+10枚 (画帖装) |  | 千總印G、「日口氏蔵書印」       |
| 18           | 『諸家地紋式』      | 板本 (絵手本)       | 1777 (安永6) 年刊行        | 18.8×13.3 (楕中本)   | 表・裏表紙+54丁       |  | 千總印B                |
| 19           | 『新形小紋帳』      | 板本 (絵手本)       | 1824 (文政7) 年刊行        | 17.8×12.0 (中本)    | 表・裏表紙+28丁       | 「己明治貳巳五月吉日 長谷川利右衛門」  | 千總印A                |
| 20           | 『諸職必用紋切形』    | 板本 (絵手本)       | 1848 (弘化5) 年刊行        | 18.2×12.4 (中本)    | 表・裏表紙+31丁       | 「文久元年 長谷川利右衛門 西澤月吉目」   | 千總印A                |
| 21           | 『模様紋帳諸鑑鑑形』   | 板本 (絵手本)       | 1881 (明治14) 年刊行       | 18.1×12.1 (中本)    | 表・裏表紙+36丁       | 「京都市 西村総左衛門所蔵」、「西村総左衛門所蔵」、「京都市御倉町 西村総左衛門蔵」                         |                     |

※墨書および印影のうち、削り取られたり墨消しされているものについては、打ち消し線を引く形で示した。

※墨書のうち、千總での管理用に付されたと思われる号数等については、表中では割愛した。

表2 千總蔵書印リスト

| 本稿での表記 | 印影の翻刻                | 印の制作・使用時期                                | 印影の図  |
|--------|----------------------|--|---|
| 千總印 A  | 西村總左衛門所蔵之印章          | 不明                                       |    |
| 千總印 B  | 京都御倉町西村總左衛門所蔵之印章     | 不明                                       |    |
| 千總印 C  | 京都三條烏丸西へ入町<br>西村総左エ門 | 不明                                       |    |
| 千總印 D  | 京都三條烏丸西へ入町<br>西村組商店  | 1880（明治13）年～ <sup>1</sup>                |   |
| 千總印 E  | □□總南店所蔵              | 1903（明治31）年～<br>1919（大正8）年 <sup>2</sup>  |  |
| 千總印 F  | 千總商店所蔵               | 1919（大正8）年～<br>1937（昭和12）年 <sup>3</sup>  |  |
| 千總印 G  | 株式会社千總商店意匠部印         | 1937（昭和12）年～<br>1946（昭和21）年 <sup>4</sup> |  |
| 千總印 H  | 株式会社千總蔵書印            | 1946（昭和21）年～ <sup>5</sup>                |  |

注1 千成組から西村組へ改称したのが1880（明治13）年であることから、これ以降に制作・使用されたと考えられる。

注2 外国方であった西店に対して内国方であった東店を南店に改称したのが1903（明治31）年である。また、南店は1919（大正8）年に千總商店に改称されたことから、この間に制作・使用されたと考えられる。

注3 千總南店を千總商店に改称したのが1919（大正8）年である。その後株式会社化する1937（昭和12）年までの間に制作・使用されたと考えられる。

注4 千總が株式会社化し、株式会社千總商店に改称した1937（昭和12）年から、株式会社千總へ改称した1946（昭和21）年までの間に制作・使用されたと考えられる。

注5 社名を株式会社千總へ改称したのが1946（昭和21）年であることから、これ以降に制作・使用されたと考えられる。

て、後者は顧客それぞれ専用に制作されるものであった。そのため、武家女性に用いられた雛形図には、仕立て上がりの寸法や模様の変更箇所、加飾の仕様などを示す付箋が残っていることも多い。肉筆の雛形についてみる際には、「肉筆」かつ「雛形」という要素を持ちながらも、異なる性質を備えている資料が複数含まれていることに留意する必要がある。

今回調査した資料は、肉筆小袖雛形類 14 点と、これに関連するその他の資料 7 点である。肉筆小袖雛形類には、町人女性向けの肉筆雛形本 13 点（うち 1 点は男児向けの模様の特化している）と、武家女性向けの肉筆雛形 1 点が含まれる。その他の資料には、肉筆雛形本と併せて用いられた色見本帳 1 点と、呉服制作の参考に職人が用いていたと考えられる板本の絵手本類 4 点、肉筆の図案集 2 点が含まれる。

## 調査結果

### (1) 『古本墨絵雛形』

本文 10 丁に、紺色の表紙・裏表紙が備わっている。表紙左上には「古本 墨絵雛形 一」と墨書きされた題箋が、右上には千總商店の管理ラベルが貼付されている。前見返しには千總印 F が捺されている。判型は半紙本で、肉筆雛形本によく見られる大本の判型と比較するとひとまわり小さい。

本文には、1 頁につき 1 図ずつ、背面から見た形の袖形を用いて腰模様を描いている。肉筆雛形本の多くが、裾模様・袂模様の図示に適した上前・下前の小袖形を用いている点と比較すると、その図示形式はむしろ板本の小袖雛形本に近い。番号は付されておらず、全部で 20 図を収録している。一部、彩色がなされている。第 6 丁表の模様図には、紋の箇所を示していると思われる白抜きのおこなが、背中と両袖の三箇所を描かれている。

小袖雛形本に見られる小袖形は、同じ背面から見た形であっても、袖の丸みや裾の広がりなど、細部の表現に差異がある。本資料に見られる小袖形と類似する特徴を示す小袖形を用いている小袖雛形本を中心に調査したところ、本資料に収録された模様との関連性が見出されるものがあつた。

本資料の第 1 丁裏に描かれた蟹と笹の模様（図 1-1）は、1727（享保 12）年刊行『雛形天の橋立』中巻の百八番の図（図 1-2）とほとんど一致していることから、これを参考にして描かれたものであると考えられる。一方で、笹に虫喰いや朽ちた表現を追加するなど、変更が加えられている箇所もあり、完全なコピーではないことが分かる。

ほとんど一致するものは上記の 1 例しか確認することができなかったが、部分的に類似するものがこの他にも複数例確認できた。例えば、第 4 丁裏に描かれた鹿に紅葉の模様（図 1-3）は、1714（享保 9）年刊行『雛形鶴の声』下巻の百四十七番の図（図 1-4）と類似している。また、第 4 丁表に描かれた馬に流水の模様は、1730（享保 15）年刊行『雛形三光鳥』上巻の百四十九番の図の腰から下に描かれた模様と類似している。以上のように、本資料は小袖雛形本を参考にして描かれたものと考えられるが、もとの模様図をほとんどそのまま引用したり、あるいは一部のみ引用したり、模様の主題のみを引用したりと、さまざまな参考の方法が確認できた。



(左) 図 1-1 『古本墨絵雛形』蟹と笹の図



(右) 図 1-2 『雛形天の橋立』中巻 国立国会図書館蔵



(左) 図 1-3 『古本墨絵雛形』鹿に紅葉の図



(右) 図 1-4 『雛形鶴の声』下巻 立命館大学 ARC 蔵

右肩に向かって斜めに模様が登る腰模様の構図は、江戸時代、18世紀半ば頃の特徴を示している。紙の経年変化等を鑑みると、本資料が制作されたのも同時期であると推測される。肉筆雛形本の推定成立年代は18世紀末頃であることから、本資料は、肉筆雛形本としてはかなり早い時期に制作されたものであると言える。小袖雛形本の刊行がまだ盛んであった18世紀半ば頃に制作された本資料は、上客である富裕な町人女性に対して、既製の小袖雛形本よりも魅力的なオプションとして制作されたものであったと考えられる<sup>12)</sup>。

肉筆雛形本は、小袖雛形本の衰退に伴ってその機能を代替し、町人女性の呉服注文において使用が定着したと考えられている。一方で、小袖雛形本の刊行がまだ盛んに行われていた18世紀半ばに制作されたと考えられる本資料の存在は、肉筆雛形本出現に至る最初期の動機を考察する上で非常に重要なものであると言える。

## (2) 『梅印御召惣模様新雛形』

本文20丁に、型押しで模様を表した浅葱色の表紙・裏表紙が備わっている。表紙中央には、砂子で装飾された題箋が貼付されている。題箋には「梅印 御召惣模様新雛形 全」と墨書きされており、余白に「□□御召用」の墨書きと千總印Dが確認できる(図2-1)。表紙右上には千總商店の管理ラベルが貼付され、その下には打ち消し線が引かれた「□五拾七號」の朱書きと、「京都市御倉町西村総左衛門所蔵」の墨書がある。題箋左には、千總での管理用と思しき「第壺式〇號 壺冊」の墨書がある。前見返し及び後見返しには千總印Bが捺されている。後見返しには「此御召雛形何方様へも参り候共早速御戻し可被下候以上」と、本資料の使い方に関する墨書が残るほか、もとの所蔵者と思われる「寺町三條下ル町 長谷河小店」の署名に打ち消し線が引かれている。

裏表紙には「京都市御倉町 西村総左衛門所蔵」と墨書きされている。

本文には、1頁につき1図ずつ背面から見た形の袖形を描き、「惣模様」と書名に冠している通り、総模様を表している(図2-2,3)。番号はないが、全40図を収録している。収録されている模様は、武家女性と町人女性のものの両方の要素を併せ持っている印象を受けるが、本資料は、富裕な町人女性向けに制作されたものであると推測される。江戸時代後期になると、同じ町人女性の中でも、特に富裕な人々の小袖模様には、中流以下の人々とは異なる特徴が見られるようになった<sup>13)</sup>。これは、町人身分の経済力が向上した江戸時代後期にあって、中流以下の町人を含むより広い階層が呉服注文に参画するようになったことが背景としてある。富裕な町人女性は、武家女性に近づきたいと願うようになり、中流以下の町人女性との差別化を図るため、武家女性の小袖に多用される綸子の生地や刺繍の技法とともに、模様においても武家女性寄りのものを好むようになったのである。

このような背景で生まれた富裕な町人女性の小袖の様式は豪華なもので、現存するものの多くは吉祥模様を配した婚礼用のものである。立木模様に吉祥のモチーフを



(左) 図2-1 『梅印御召惣模様新雛形』題箋  
(中) 図2-2 『梅印御召惣模様新雛形』立木模様の図  
(右) 図2-3 『梅印御召惣模様新雛形』単位模様の図



(左) 図2-4 紅綸子地松笹鶴模様打掛 江戸時代・19世紀 共立女子大学博物館蔵  
(右) 図2-5 白綸子地松御簾模様打掛 江戸時代・19世紀 共立女子大学博物館蔵

添えるものや、単位模様を意匠全体に配するものが多い。本学博物館所蔵の富裕な町人女性の小袖にも同様の特徴が見られ、本資料に収録された模様と類似する作品がある（図 2-2 と 2-4、図 2-3 と 2-5）。本資料に収録された模様図からは、生地や加飾技法といった要素を読み取ることはできないが、模様を豪華かつ写実的に表す様式は、富裕な町人女性の小袖の現存遺品に見られるそれと合致している。富裕な町人女性向けの肉筆雛形本は、筆者もその可能性が疑われる資料を数点目にしたことがあるのみで、詳細な確認はできていないのが現状であり、さらなる研究が必要である。

本資料の制作年代は、模様の特徴から、江戸時代、18 世紀第三四半期から 19 世紀前半であると推測される。

### (3) 『御所解雛形』

本文 47 枚に、裂で装飾された表紙・裏表紙と扉 1 枚が備わっている。収録されている模様や図示形式などから、もとは武家女性向けに制作された肉筆の呉服注文用雛形であったことがわかる。千總の『図書部購入台帳』には、購入年が 1920（大正 10）年であることと、「古代写ヲ 10 年 8 月北川ニテ製本ス」との記録が残っている<sup>14)</sup> ことから、扉や表紙・裏表紙といった装丁は、購入した際に改めて整えられたものであると考えられる。判型は他の肉筆雛形本や小袖雛形本と比較して大きい 35.3 × 28.7cm である。美濃判の全紙に近いが、長辺がやや短い。武家向けの肉筆雛形には、美濃判の全紙を用いるものがよく見られることから、本資料もそうした例の一つであると考えられる。長辺がやや短くなっているのは、装丁し直した際に一部を裁断して整えたからであろう。表紙左上には「御所解雛形」と墨書きされた題箋が貼付されるほか、千總商店の管理ラベルが貼付されている。

本文には、1 枚につき 1 図ずつ、背面から見た形の袖形を描き模様を表している。武家向けの肉筆雛形に見られる小袖形は、直線のみで構成されており、袖丈と身丈の比率や、小袖形に対する模様の大きさの比率などが、実物の小袖におけるそれと近い。町人向けの肉筆雛形本や小袖雛形本に見られる小袖形に曲線的な表現が取り入れられている点や、小袖形と模様の比率が必ずしも現実には忠実ではない点と比較して、特徴的に異なる。町人女性の呉服注文に用いられた肉筆雛形本及び小袖雛形本は、顧客に対して模様のイメージを想起させるためのものであり、忠実性はさほど求められていなかった。一方で、武家向けの肉筆雛形は、業者と顧客とのやり取りで使用された後は、制作を担う職人に対する仕様台帳としても使用されたため、忠実性が求められたものと推測される。図示形式における差異には、このような背景が関係していると考えられる。

小袖形の右袖下の余白には朱書きで番号が記されている。一番が欠けており、二番から四十八番までの 47 図を収録している。この通し番号は、現在の冊子の形に装丁された際に後から書き込まれたものである可能性を指摘できる。これは、本資料に収録されている模様には、武家女性の小袖に用いられたものと、打掛に用いられたものが混在しているからである。前者は御所解模様と呼ばれる典型的な風景模様（図 3-1）で、後者は四季の草花で構成される花束や花車、花筏などを全体に満遍なく散らし、間に有職風のモチーフを配するものである<sup>15)</sup>（図 3-2）。大量発注という特性上、一度に扱う雛形の枚数が膨大になる武家向けの肉筆雛形では、その内容を模様の種類によって分類しているものが多く見られる。例えば、前述した蜂須賀家の肉筆注文雛形では、打掛に用いる模様を表した雛形をまとめ、「御りん子」と書いた畳紙で包んでいる。「御りん子」と称しているのは、定型化した武家女性の打掛には綸子の生地を用いることが多かったことによると考えられる。また、御所解模様を表した雛形については、模様を施す範囲によって分類しており、模様が全体にわたる「総（惣）模様」、腰上あたりを境に右上がり模様はわたる「中模様」、腰あたりまでの「腰模様」、裾あたりのみの「裾模様」にそれぞれ分かれている。例示した蜂須賀家のもの以外にも、同様の分類に基づいた雛形は複数存在している。

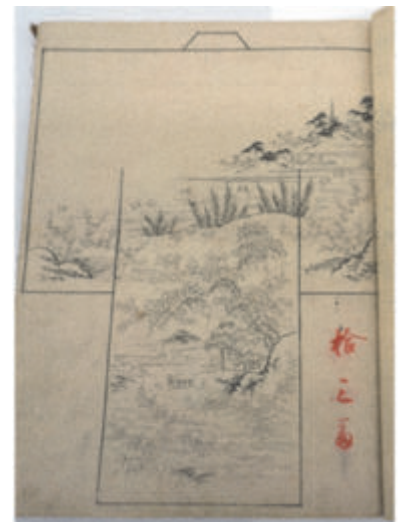


図 3-1 『御所解雛形』 拾三番の図

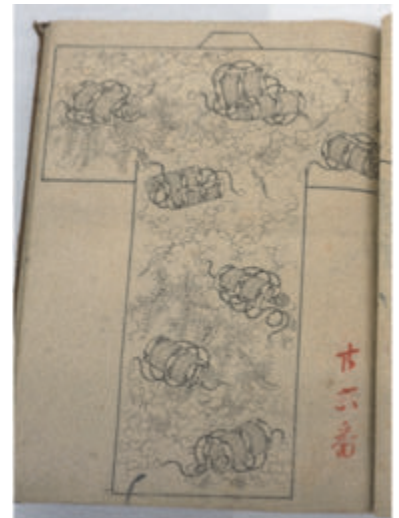


図 3-2 『御所解雛形』 廿六番の図

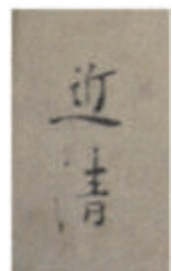


図 3-3 『御所解雛形』  
墨書

ここで本資料に立ち返ってみると、異なる種類の模様が混在しているのは、もとはばらばらに存在していたものを後年に一冊にまとめたためであると推測され、現在の冊子の頁順に付けられている通し番号は、冊子の状態になったのちに付け加えられたものであると考えることができる。

一部には、小袖形の左袖下の余白に「近清」の墨書（図3-3）が確認できる。武家向けの肉筆雛形には、雛形を制作した、あるいは小袖の制作を担う業者の名前を示す墨書や墨印がよく見られる<sup>16)</sup>。業者名は略記されている場合もあるが、本資料にある墨書は、業者の名前を示すものであったと考えられる。

本資料の制作年代は、体裁や模様の特徴などから、江戸時代、18世紀第三四半期から19世紀前半であると推測される。

#### (4) 『天印模様雛形』

本文17丁に、後補のものと思われる白い表紙・裏表紙が備わっている。表紙左上には「天印 模様雛形」と書名が墨書きされている。右上には千總商店の管理ラベルが貼付されているほか、ラベルの下には千總での管理用と思しき号数・冊数の墨書が確認できる。表紙右下及び裏表紙中央には千總印Bが捺されている。大本の判型である。



図4 『天印模様雛形』

本文には、袋綴じの1丁の表に上前の小袖形によって褙模様を描き（図4右）、裏に褙模様の一部拡大図（図4左）を描いて一組の模様図としている。上前の小袖形を用いた全体図と拡大図を組み合わせる図示形式は、裾模様・褙模様を収録する肉筆雛形本によく見られる。小袖の前面が模様の主体となる裾模様・褙模様を図示する上では、背面から見た形ではなく、上前・下前的小袖形が最も適していた。一方で、裾模様・褙模様は模様の範囲が狭く、全体図だけでは模様の細部を表現できないという欠点がある。拡大図には、これを補って模様の細部を表現するほか、原寸大を図示する目的があったと考えられる。全部で17丁に17組の模様図を収録する。番号の記載はない。

収録されているのは全て褙模様であることから、町人女性向けに制作されたものであることがわかる。また、通常の褙模様よりも模様の範囲が広く、衽から衿を経て胸にまで達する「島原褙」と呼ばれるものを多く収録している。

体裁や収録する模様図の特徴から、制作年代は江戸時代、18世紀の第三四半期から19世紀前半であると推定される。

#### (5) 『妻印』

「模様雛形 四冊」と題箋がついた帙に（8）『書印』・（9）『鳥』の二書とともに収められていた大本の判型の一書。袋綴じにした本文25丁に加え、模様を型押しした黄色い表紙・裏表紙と扉1枚が備わっている。表紙中央には「妻印」、右下には「四冊ノ内 参」と墨書きされている。右上には株式会社千總参考館の管理ラベルが貼付されている。前見返し及び扉には、紙を貼付して何かを目隠しした痕跡があるほか、「京都鳥谷所蔵之印章」と書かれた朱印を墨で×字に消し、その下に千總印Hを捺している（図5-1）。後見返しにも同じ千總印Hが見え



図5-1 『妻印』前見返し 部分



図5-2 『妻印』

るほか、「京城東 鳥谷本店」の墨書に紙を貼付して目隠ししている。

小袖雛形本や肉筆雛形本、色見本帳の現存遺品には、所蔵を示す墨書を墨消しする例がしばしば見られ、これらが業者によって流用されたことを示している。本資料に残る痕跡も、「鳥谷」という業者から千總に所蔵が移った際に、もとの所蔵の表記を消そうとしたものであると考えられる。

本文には、1 頁につき 1 図ずつ、上前または下前の小袖形によって裾模様を表している（図 5-2）。体裁や模様の特徴から、制作年代は江戸時代、19 世紀前半であると推定される。頁の上部余白には番号が記され、第壱號から第五拾號までの 50 図が収録されている。この「號」の表記は明治時代以降に見られるため、番号については後年に付記された可能性を指摘できる。

第壱號の小袖図袖下の余白には、四角く何かを墨消しした痕跡と、「鳥谷」の文字を丸く囲った墨書が確認できる（図 5-3）。肉筆雛形本には、これを制作・所蔵した業者の墨印が残る例がある。もとは「鳥谷」ではない業者が制作したものであり、これを「鳥谷」が流用するにあたってもとの業者の墨印を墨消しした可能性もある。千總が所蔵するに至るまで複数の人の手を渡った経緯を感じさせる資料である。



図 5-3 「妻印」墨書

## (6) 『小模様』

「模様雛形 四冊」と題箋がついた帙に（7）『數印』・（11）『樂印』・（12）『霧印』の三書とともに収められていた大本の判型の一書。袋綴じにした本文 25 丁に加え、模様を型押しした黄色い表紙・裏表紙が備わっている（図 6-1）。表紙中央には題箋が剥落した痕跡があり、黒い枠が残っている。枠の中には「小模様」と小さく墨書きされるほか、朱印（判読が困難だがおそらく千總印 H か）が残っている。枠の左には「□□□染所」と縦書きした朱印（図 6-2。以下「朱印 X」と表記する。）を削り取った痕跡がある。表紙右上には株式会社千總参考館の管理ラベルが貼付され、右下には「四冊ノ内 参」と墨書きされている。前見返し及び後見返しには千總印 H が捺されている。これに加え、後見返しには「京都 鳥谷染店」の墨書が残っている。



（左）図 6-1 『小模様』表紙

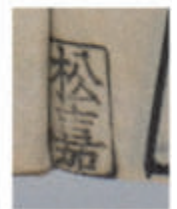


（右）図 6-2 『小模様』表紙 朱印部分

本文には、1 頁につき 1 図ずつ、上前または下前の小袖形によって裾模様・裾模様を表している（図 6-3）。第 3 丁表のみ、小袖形の袖丈が長く、振袖を意識した表現が見られる。体裁や模様の特徴から、制作年代は江戸時代、19 世紀前半であると推定される。番号は記されていない。全部で 50 図を収録する。模様図は彩色されているが、色数は少なく、色合いも落ち着いた。最後の 3 丁のみ、小袖形の表現が異なっており、彩色もなされていない。第 1 丁表の上部余白には紙が貼付され、朱印 X と思われる印影が目隠しされている。最終丁裏の袖下の余白には「松嘉」の文字を四角く囲った墨印が捺されている（図 6-4）。(5) 『妻印』第壱號の小袖図で四角く墨消しされていた箇所と大きさが一致する。両者が同じ「鳥谷」の旧蔵資料であることを考えると、どちらももとは「松嘉」という業者が制作したものであった可能性を指摘できる。



（左）図 6-3 『小模様』



（右）図 6-4 『小模様』印影

## (7) 『數印』

「模様雛形 四冊」と題箋がついた帙に（6）『小模様』・（11）『樂印』・（12）『霧印』の三書とともに収められていた大本の判型の一書。袋綴じにした本文 24 丁に加え、模様を型押しした黄色い表紙・裏表紙が備わっている。表紙中央の題箋には「數印」の

墨書と千總印 H が残るほか、朱印または朱書きを削り取った痕跡がある。大きさや僅かに残る痕跡から、もとは朱印 X が捺されていたものと推測される。表紙右上には株式会社千總参考館の管理ラベルが貼付され、右下には「四冊ノ内 貳」と墨書きされている。前見返しには、紙を貼付して朱印 X と思われる印影を目隠しする箇所があるほか、千總印 H が捺されている。後見返しにも千總印 H が残るほか、「京都 鳥谷染店」の墨書が確認できる。(5)「妻印」では目隠しされていた「鳥谷」の署名であるが、本資料では目隠しされていない。「染店」とあることから、「鳥谷」が染色関係の業者であったことが分かる。

本文には、1 頁につき 1 図ずつ、上前または下前の小袖形に裾模様を表している (図 7)。頁の上部余白には番号が記され、壺番から四十八までの 48 図が収録されている。模様図は彩色されているが、色合いは落ち着いた。一方で、(6)『小模様』の彩色と比べてみると、色数は増え、一部流水の表現などに使われている青色に、化学染料の鮮やかな発色が認められる。このことから、制作年代は江戸末から明治時代の 19 世紀後半であると推定される。

#### (8)『書印』

「模様雛形 四冊」と題箋がついた帙に (5)『妻印』・(9)『鳥』の二書とともに収められていた大本の判型の一書。袋綴じにした本文 26 丁に加え、模様を型押しした黄色い表紙・裏表紙が備わっている。表紙中央には題箋が貼付され、「書印」の墨書と千總印 H がある。また、(6)『小模様』などと同様に朱印 X を削り取った痕跡がある。表紙右上には、株式会社千總参考館の管理ラベルが貼付され、右下には「四冊ノ内 壺」と墨書きされている。前見返しには千總印 H が捺されているほか、表紙と同じ朱印 X の印影を削り取った痕跡がある。後見返しにも千總印 H があるほか、「京都 鳥谷染店」の墨書の上に紙を貼付して目隠ししている。

本文には、1 頁につき 1 図ずつ、上前または下前の小袖形によって裾模様を表している (図 8)。小袖形の衿付近の余白に番号を付し、壺番から五十式までの 52 図を収録する。壺番から拾壺及び拾六の 12 図にのみ、番号に加えて模様題を記している。模様図は落ち着いた色合いで彩色されているが、(7)『数印』と同様に、一部黄色などに化学染料の鮮やかな発色が認められることから、制作年代は江戸末から明治時代の 19 世紀後半であると推定される。

#### (9)『鳥』

「模様雛形 四冊」と題箋がついた帙に (5)『妻印』・(8)『書印』の二書とともに収められていた大本の判型の一書。袋綴じにした本文 24 丁に加え、模様を型押しした黄色い表紙・裏表紙が備わっている。表紙中央には題箋が貼付され、「鳥」の墨書と千總印 H がある。また、(6)『小模様』などと同様に朱印 X を削り取った痕跡がある。このほか「阪江大阪支店印章」と書かれた朱印 (図 9-1) が捺されている。表紙右上には、株式会社千總参考館の管理ラベルが貼



図 7 『数印』



図 8 『書印』



(左) 図 9-1 『鳥』印影

(右) 図 9-2 『鳥』

付され、右下には「四冊ノ内 貳」と墨書きされている。前見返しには千總印 H が捺されているほか、本紙を一部切り取った上に別の紙を貼り付けた痕跡がある。切り取り箇所の大きさや他の資料の例も鑑みると、もとは表紙と同じ朱印 X が捺されていたと推測される。後見返しには千總印 H と、表紙にあったものと同じ「阪江大阪支店印章」の朱印が捺されている。裏表紙には、下部中央に紙を貼付して「阪江店」の墨書きを目隠ししている。

本文には、1 頁につき 1 図ずつ、上前または下前の小袖形によって裾模様を表している（図 9-2）。小袖形の衿付近の余白に番号を付し、壺番から四拾八までの 48 図を収録する。模様図は落ち着いた色合いで彩色されているが、(7)『數印』や (8)『書印』と同様に、一部黄色などに化学染料の鮮やかな発色が認められることから、制作年代は江戸末から明治時代の 19 世紀後半であると推定される。

#### (10) 『大印新雛形』

大本の判型の一書。袋綴じにした本文 24 丁に加え、くすんだ型押し紙の表紙・裏表紙が備わっている（図 10-1）。表紙中央には題箋が貼付され、「大印新雛形」の墨書と千總印 H がある。また、(6)『小模様』などと同様に朱印 X を削り取った痕跡がある。表紙右上には、株式会社千總参考館の管理ラベルが貼付され、右下には「四冊ノ内 四」と墨書きされている。前見返しには千總印 H が捺されているほか、紙を貼付して何かを目隠ししている箇所がある。反対頁に朱が移っていることや、その大きさなどから、もとは表紙と同じ朱印 X が捺されていたと推測される。また、前見返しには、金の切箔と砂子によって装飾された紙が用いられている（図 10-2 右頁）。こうした見返しの装飾や型押し紙の表紙は、肉筆雛形本と併せて用いられていた色見本帳でもよく見られるものである。後見返しには「京印 □□□□」の墨書の上に何かを貼付して剥がした痕跡があり、墨書が判読不能になっている。このほか、千總印 H と、「京都 鳥谷□□印」の朱印（図 10-3）が捺されている。

本文には、1 頁につき 1 図ずつ、上前または下前の小袖形によって裾模様を表している（図 10-2 左頁）。頁の上部余白に番号を付しているが、省略している頁も多い。壺番から四十八までの 48 図を収録している。模様図は落ち着いた色合いで彩色されているが、ピンクや黄色など、一部に化学染料の鮮やかな発色が認められる。体裁や模様の特徴も合わせると、制作年代は明治時代前期、19 世紀後半であると推定される。



図 10-1 『大印新雛形』表紙



(左) 図 10-2 『大印新雛形』前見返し・本文



(右) 図 10-3 『大印新雛形』印影

#### (11) 『樂印』

「模様雛形 四冊」と題箋がついた帙に (6)『小模様』・(7)『數印』・(12)『霧印』の三書とともに収められていた大本の判型の一書。袋綴じにした本文 46 丁に加え、模様を型押しした黄色い表紙・裏表紙が備わっている。表紙中央には題箋が貼付され、「樂印」の墨書と千總印 H がある。また、(6)『小模様』などと同様に朱印 X を削り取った痕跡がある。表紙右上には、株式会社千總参考館の管理ラベルが貼付され、右下には「四冊ノ内 壺」と墨書きされている。前見返しには千總印 H が捺されているほか、表紙と同じ朱印 X の印影と思われるものに紙を貼付して目隠ししている。後見返しには千總印 H と、「京都 鳥谷染店」の墨書がある。

本文は、内容や体裁、紙質が異なる丁が混在していることから、もとはバラバラであったものを合本して一冊にしたものであると考えられる。明治時代の男児の祝い着には、子供の健やかな成長を願って、宝尽や鶴亀といった吉祥模様が用いられたほか、犬や馬といった元気をイメージさせるモチーフが用いられた<sup>17)</sup>（図 11-1）。本資料に描かれている模様は全て、吉祥模様や元気で力強いイメージを想起させる生き物であることから、男児向けの模様を集めたものであることがわかる。大人の町人女性向けの模

様を収録することが基本である肉筆雛形本においては珍しい存在である。しかし、小袖雛形本の中には1720（享保5）年刊行『雛形菊の苗』や1749（寛延2）年刊行『雛形児桜』のように、子供向けの模様に特化した例があったことから、男児向けの



図 11-1 黒平絹地竹虎模様一つ身  
明治時代・19世紀後半  
共立女子大学博物館蔵



図 11-2 『楽印』第4丁



模様に特化した本資料の存在は不自然ではないと言える。また、少数ではあるが袱紗や夜着の模様だけを集めた肉筆雛形の現存遺品も存在している。

第11～12丁を除く第1～21丁までの19丁には、袋綴じにした丁の表に背面から見た形の袖形を配し、裏に拡大図を配して男児向けの熨斗目模様を表している（図11-2）。熨斗目模様とは、着物の腰のあたりに吉祥模様などを配した「腰替わり」とも呼ばれる模様形式のこと<sup>18)</sup>で、特に明治時代前期から中期にかけての男児の一つ身や四つ身によく見られる<sup>19)</sup>（図11-3）。本資料では、本絵さながらの絵画的な表現が見られる点が特徴的であり、一部には水で墨を滲ませてぼかす技法を用いるものや、ステンシルの技法を用いるものがある。一部彩色がなされている。



図 11-3 濃茶平絹地波鶴模様一つ身  
明治時代中期・19世紀後半  
筆者蔵

第10～11丁、第22～26丁、第31～36丁、第43～45丁の合計16丁には、袋綴じにした丁の表に袖形を配し、裏に拡大図を配して男児向けの模様を表している（図11-4）。小袖形の形式には、背面から見た形と上前の形の2種類がある。一部彩色がなされている。

第27～30丁及び第46丁の5丁には、袋綴じにした丁の表に下前と右袖が、丁の裏に上前と左袖が描かれている（図11-5）。両袖下には、背面の裾付近にあたる模様が描かれており、袋綴じを開いて一枚の状態にすると、紙の全面に小袖の表面と裏面両方の模様が読み取れる形式になっている。このような形式は、武家向けの肉筆呉服注文雛形にもしばしば見られる<sup>20)</sup>。

第37～42丁の6丁には、小袖形は描かれず、模様のみが描かれ、一部彩色されている。



図 11-4 『楽印』第34丁



図 11-5 『楽印』第46丁



最初に記した罫斗目模様を表すものについては、制作年代を明治時代前期から中期、19世紀後半と推定できる。合本された経緯を踏まえると、上に記した各形式がそれぞれ別の時代に制作された可能性も考えられるが、他の2種についても、異なる要素はあるものの、罫斗目模様のものと大きく時代が隔たる特徴は見受けられなかったため、制作年代を同時期であると推定した。

## (12) 『霧印』

「模様雛形 四冊」と題箋がついた帙に(6)『小模様』・(7)『敷印』・(11)『楽印』の三書とともに収められていた大本の判型の一書。袋綴じにした本文36丁に加え、模様を型押しした黄色い表紙・裏表紙が備わっている。表紙中央には題箋が貼付され、「霧印」の墨書と千總印Hがある。また、(6)『小模様』などと同様に朱印Xを削り取った痕跡がある。表紙右上には、株式会社千總参考館の管理ラベルが貼付され、右下には「四冊ノ内 四」と墨書きされている。前見返しには千總印Hが捺されている。後見返しには千總印Hと、「京都 鳥谷染店」の墨書がある。第1丁表にのみ、表紙と同じ朱印Xを削り取った痕跡がある。

本文には、1頁につき1図ずつ模様を表している(図12-1)。小袖形はなく、頁全体に模様を描いている。頁右上部に番号を付し、壺番から七十一までの全71図を収録する。三十七の図のみ、丁の表から裏にわたって1図を描いている。小袖雛形本の流れを汲む肉筆雛形本は、その図示形式を受け継ぎ、小袖形を用いて模様を表すものが多く、模様の拡大図は、そのディテールや原寸大を示す上で付け加えられたものであった。江戸時代の18世紀にかかる頃は、模様が衿から衿にまでのぼる襷模様も多かったが、時代が下るに連れて模様範囲はさらに狭まり、裾周辺のごくわずかのみが表現の場となった。この時期の肉筆雛形本には、小袖形全体の大きさとの比率を考えると、実際よりもかなり大きく模様を図示する例が見られる(図12-2)。当初は全体図を示すために用いられていた小袖形だが、裾模様が定着して模様の配置箇所や範囲に対する共通認識が業者と顧客との間で生まれると、全体図の必要性は低下し、代わりに模様を大きく描いてディテールや原寸大を示すことが求められるようになったと考えられる。本資料のように、小袖形をもはや用いず、頁全体に大きく模様を描くものは、こうした経緯で生まれたものであると言えるだろう。

一部には彩色があり、前述までのものに比べて発色が鮮やかで色数も多い。二十一や六十六など一部の図には、絵の具を紙に飛び散らせて霧状に表現する吹き墨の技法が用いられている(図12-1左頁)。これはぼかし染を意識していると考えられる。また、植物や動物は写實的に表現されている。こうした写實的・絵画的な表現は、明治時代後期の20世紀初頭に見られる特徴である。一方で、江戸時代以来の伝統的な植物模様や、明治時代前期の19世紀後半に見られる風景模様なども多く収録されていることから、後期の表現に向かいつつある明治時代前期から中期、19世紀後半に制作されたものであると推定した。

ほとんどの頁には「扇□(襦か)」の文字を四角く囲った朱印が捺されている(図12-3)。前述した蜂須賀家の肉筆注文雛形に、これとほぼ一致する印影を確認することができた。本資料と同様の朱印と、文字は同じであるが墨印であったものの二種類が見られた(図12-4)。いずれも小袖形の右裾下に捺されている。蜂須賀家の肉筆雛形には、他にも「ゑびすや」や「近江屋」のように、雛形を制作した、あるいは小袖の制作を担ったと思われる業者の印影が確認できる。このことから、本資料に確認できた朱印も、同様に業者のものであると考えられる。



図 12-1 『霧印』



図 12-2 ひながた帳 メトロポリタン美術館蔵

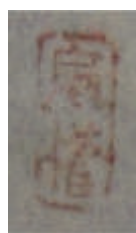


図 12-3 『霧印』  
印影

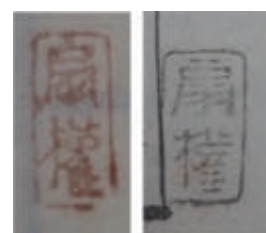


図 12-4 蜂須賀家肉筆雛形  
個人蔵 印影

### (13)『雲印』

大本の判型の一書。袋綴じにした本文49丁に加え、模様を型押しした黄色い表紙・裏表紙が備わっている。表紙中央には題箋が貼付され、「雲印」の墨書と千總印Hがある。また、(6)『小模様』などと同様に朱印Xを削り取った痕跡がある。表紙右上には、株式会社千總参考館の管理ラベルが貼付され、右下には「貳冊ノ内 壺」と墨書きされている。前見返しには砂子で装飾した紙が用いられ、千總印Hが捺されている。また、朱印Xの印影と思われるものを目隠しするための紙が貼付されている。後見返しも前見返しと同様の装飾紙が用いられ、千總印Hが捺されている。また、「京都 鳥谷店」の墨書に紙を貼付して目隠ししている。

本文では、見開きの2頁全体を四角く枠取り、中に模様を1図ずつ描いている(図13-1)。第1丁の表と最終丁の裏のみ、1頁に1図を描いている。(12)『霧印』で前述したように、裾模様の定着によって小袖形を用いた全体図はもはや必要ではなくなり、見開きいっぱいに模様を大きく描くことで、ディテールや原寸大を示した例である。形式や収録する模様の表現は、明治時代に制作・使用された友禅染の裂見本帳<sup>21)</sup>(図13-2)に類似しており、関係性が示唆される。

第1丁の表を飛ばし、第1丁裏から始まる見開きから、枠の右上に番号を付している。一番から四十九までの49図に加え、番号がついていない最初の1図を加えた全50図を収録する。模様は彩色され、前述までのものに比べると鮮やかで色数も多い。明るい色合いは、化学染料を意識していると考えられる。西洋の蝶のモチーフや、鳥や植物の写実的な表現は、明治時代後半の着物の模様表現の特徴を示している<sup>22)</sup>。一方で、江戸時代以来の伝統的な植物表現や、明治時代前半の着物によく見られる風景模様も収録している。このことから、制作年代は、両者の過渡期にあたる明治時代中期、19世紀後半であると推定される。



図 13-1 『雲印』



図 13-2 友禅染裂見本帳 明治時代・19世紀 京都国立博物館蔵

### (14)『松印裾模様雛形』

袋綴じにした本文44丁に、後補のものと思われる白い厚紙の表紙・裏表紙が備わっている。さらに、またその外側に鼠色の裏表紙が残っている。表紙中央には「松印 裾模様雛形」と書名が墨書きされるほか、左下に「京都市御倉町 西村總左衛門蔵」と墨書きされている。右上には千總商店の管理ラベルが貼付されているほか、千總での管理用と思しき号数・冊数の墨書が確認できる。厚紙の裏表紙には「京都市御倉町 西村總左衛門所蔵」と墨書きされている。鼠色の裏表紙には千總印Eが捺されている。判型は大本よりもやや大きい。

第1～3丁及び第36～44丁の12丁には、1頁または見開き2頁に1図ずつ模様を描いている(図14-1)。合計16図を収録する。第1丁表の図には、打ち消し線が引かれた「第百五拾七號」の朱書きがあるほか、千總印Dが捺されている。第1～3丁は明るい色合いで彩色されている。第36～44丁については彩色されておらず、紙質や画風の違いから、もとは別であったものを合本した可能性もある。

第4～35丁の32丁には、1頁につき1図、上前または下前の小袖形を描いて裾模様を表している(図14-2)。合計64図を収録する。本稿で述べた他の肉

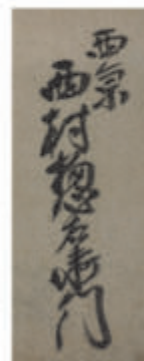


図 14-1 『松印裾模様雛形』第2～3丁



図 14-2 『松印裾模様雛形』第7～8丁

筆雛形本と異なり、小袖形の袖口や衿首、裾のふくらみなどに立体的な表現があるのが特徴的である。この特徴的な表現は、明治時代の肉筆雛形本にしばしば見られる。神坂雪佳が手がけた1890（明治23）年刊行の着物雛形本『別好京染 都乃面影』（図14-3）にも類似する小袖形が用いられていることから、これに近い時期に制作された可能性が示唆される。



（左）図 14-3 『別好京染 都乃面影』 1890（明治23）年刊行 国立国会図書館蔵  
（中）図 14-4 鼠色縮緬地梅菊巻模様振袖 明治時代・19世紀 共立女子大学博物館蔵  
（右）図 14-5 『松印裾模様雛形』 墨書

小袖形に描かれた模様は、化学染料を意識した明るい色合いで彩色されている。模様図の中

には、地全体を濃鼠色で塗りつぶし、裾と袖の下部をシルエット状に染め分けて模様を表す特徴的な表現が3図確認できる（図14-2左頁）。これは、明治時代中期の着物（図14-4）や着物雛形本（図14-3）に見られる模様であり、この時期に流行していたものである。このことから、本資料の制作年代も同時期の明治時代中期、19世紀後半であると推定できる。

最終丁裏には、「西京 西村惣右衛門」と墨書きされている（図14-5）。千總の当主は代々「總（惣）左衛門」と名乗ったが、墨書には「惣右衛門」とある。十二代西村總左衛門は、1872（明治5）年に西村家へ養子入りしたが、入籍直後には總右衛門を名乗ったとされる。また、十一代西村總左衛門（大橋重右衛門）の次男・太（多）七、は1877（明治10）年9月23日に十二代西村總左衛門の兄として西村家に入籍し、總右衛門と名乗っていた。十二代西村總左衛門が家督を相続した1891（明治24）年6月23日に、總右衛門は退隠し、西村家を出た<sup>23)</sup>。このことから、總右衛門の号が使用されていた期間は1872（明治5）年から1891（明治24）年に絞られ、これは本資料の推定制作年代と同時期にあたる。千總では明治10年代には友禪染の生産が本格化していた<sup>24)</sup>ことから、總右衛門の号が使用されていた明治時代中期頃に千總で制作・使用されていたものである可能性を指摘できる。

#### （15）『鶴印色見本』

大本の判型の本文13枚に、表紙・裏表紙と扉1枚が備わっている。表紙は縦横に刷毛目で模様を施している（渋引き紙か）。表紙中央の題箋には「鶴印色見本」と墨書きされている。題箋の右には「第百卅二號」と朱書きされており、左には千總商店の管理ラベルが貼付されている。前見返し右下には千總印Dが捺されている。前見返しから扉にかけては、金の切箔と砂子によって装飾されている。後見返しも同様に砂子で装飾されている。裏表紙には「下京第三区御倉町七拾九番邸 西村總右衛門所蔵」と墨書きされている。「總左衛門」ではなく「總右衛門」の号が使用されている点については、（14）『松印裾模様雛形』と同様である。

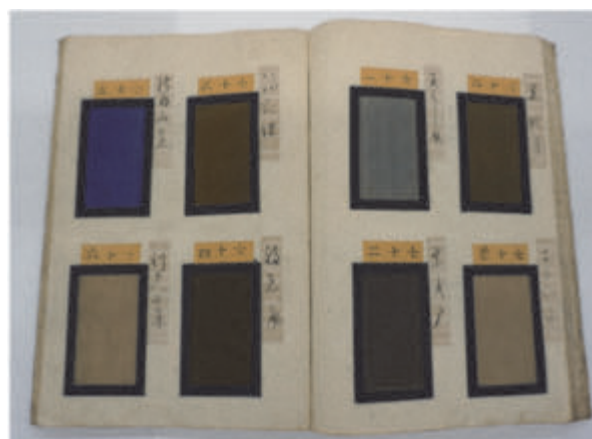


図 15 『鶴印色見本』

本文には、1頁につき4枚ずつ、実際に染色した布を貼付して色の見本としている（図15）。裂はほとんどが縮緬で、天然藍を用いていると思われる2色のみ、布ではなく染色した和紙を用いている。裂の四方には黒い枠を回している。裂の上部には番号を記した渋紙を貼付し、右横には色名を記した横刷毛目の渋紙を貼付している。一番から百までの100色を収録している。こうした特徴は、先行研究で述べられている色見本帳の基本的な形式と合致している<sup>25)</sup>。一方で、色見本帳の判型は横長のものが多いのに対して、

本資料は縦長の判型である。

一部の裂には化学染料に由来する鮮やかな発色が認められることから、明治時代以降に制作されたものであることがわかるが、多くは茶色や鼠色といった地味な色合いのもので、江戸時代後期のいき好みの風潮を受け継いでいることがわかる。

ここでもう一度本資料の判型について考えてみたい。横長の判型を基本とする色見本帳の中で、縦長の判型を持つものについては、化学染料を使用したと思われる裂が確認できず、天然染料によって染色された裂のみが使用されていることから、制作年代が江戸時代の19世紀前半にまでさかのぼると推定されるものが多い。本資料が肉筆雛形本と同じ大本の判型であることを鑑みると、色見本帳は当初、併用されていた肉筆雛形本と同じ縦長の判型で制作されることがあったものと考えられる。色見本帳の体裁が時代とともに定型化していくと、判型も横長に統一され、縦長のものが見られなくなったのではないだろうか。この推定に基づけば、本資料の制作年代は明治時代の中でも早い時期の前期、19世紀後半であると考えることができる。

#### (16)『織物更紗見本集』

美濃三つ切本の判型の一書。表紙には「織物更紗見本集」「下京第三区御倉町西村惣左衛門所蔵」「第貳〇四號 壹冊」と墨書きされている。前見返しには千總印Cが捺されている。裏表紙には千總商店の管理ラベルが貼付されるほか、「明治九年夏作（以下ラベルが重ねて貼付されており確認不能）」の墨書により、1876（明治9）年に制作されたものであるとわかる。



図 16 『織物更紗見本集』

本文は26丁からなる。1頁につき2図ずつ、正方形の枠に模様を描いている（図16）。第1丁は、枠の中にさらに飾り枠を描き、その中に、1枠につき1字ずつ「織」「物」「見」「本」と書いて扉としている。書名の通り、織物や更紗によく見られる模様が収録されており、一部にはヨーロッパ風の模様もある。また、ヨーロッパ風の模様と日本の伝統的な模様が組み合わされているものもある。型友禅の参考として用いられた可能性も指摘できる。

#### (17)『雛形模様』

青色の表紙・裏表紙を備えた画帖装の一書。判型は大本である。表紙中央には「雛形模様」と墨書きした題箋が貼付され、右上には千總商店の管理ラベルが貼付されている。最終頁には千總印Gと、「□□氏蔵書印」と書かれた朱印が捺されている（図17-1）。



図 17-1 『雛形模様』印影

本文は19枚の見開きからなる。和書は基本的に右開きであるが、本資料は左開きである。1～12枚目までの見開きには、小袖雛形本を写したと思しき模様が描かれている（図17-2）。明治時代には、江戸時代に出版された小袖雛形本の再版が相次いだ。例えば、1719（享保4）年刊行『雛形菊の井』と1724（享保9）年刊行『雛形鶴の声』をもとにして1886（明治19）年に再版された『模様雛形難波の梅』や、1716（正徳6）年刊行『珍色雛形都風俗』を再版した1903（明治36）年刊行『珍色模様都風俗雛形』などがこれにあたる。これらの再版本は、デザインソースとして図案考案の参考とされ、当時の呉服制作に活用された可能性が指摘されてい



(左) 図 17-2 『雛形模様』小袖模様の図



(右) 図 17-3 『雛形模様』古代模様の図

る<sup>26)</sup>。実際、千總の雛形コレクションには、江戸時代に出版された小袖雛形本に加え、明治時代に再版されたものが多く含まれているが、これらは商品制作力を下支えするための参考資料として、近代以降に収集が進められたことが分かっている<sup>27)</sup>。再版本のもととなった小袖雛形本は江戸時代中期に出版されたものが多いが、本資料に描かれた模様の構図や表現、モチーフについても、いずれも江戸時代中期の特徴を示していることから、再版本を参考にしたと考えられる。本資料が千總で制作されたものであるか、別の業者が制作したものを後年に千總が購入したものであるのかは判然としない。しかし、肉筆雛形本との体裁の違いなどを踏まえると、いずれの場合にも、顧客向けに制作された肉筆雛形本の類ではなく、職人が図案創出の参考としてデザインソースを描き集めた、肉筆の図案集と呼ぶべきものであると言える。

13枚目以降には、模様図の中に「法隆寺什□裂紋」や「古色紙模様」といった文言が見える(図17-3)。明治時代には、「古代」の文字を冠して、江戸時代以前、飛鳥時代頃にまで遡る工芸品に取材した図案集の出版が相次いだ。1883(明治16)年刊行『古代模様雛形』や1890(明治23)年刊行『古代模様やちくさ』などがこれにあたる。こうした出版物に収録されている模様に類似したものが本資料に見られることから、これらが本資料制作の上でのデザインソースになったことが推測される。

このような明治時代における出版物と本資料との関係性や、本資料の体裁や紙質などを踏まえると、制作年代は明治時代後期、20世紀前半であると推測される。

#### (18)『諸家地紋式』

1777(安永6)年に刊行された横中本の判型の一書。表紙は藍色で、型押しで布目(平織りの布の表面のような模様)を施している。表紙左には「地紋図式」と墨書きした題箋が貼付され、その横に千總商店の管理ラベルと、千總での管理用と思しき号数・冊数の墨書が確認できるほか、千總印Bが捺されている。千總印Bは第1丁表及び裏表紙にも確認できる。



図18 『諸家地紋式』

本文は54丁からなる。染織品をはじめとする工芸におけるデザインソースとなる模様を集め、一頁につき6図ずつ模様題とともに描いている(図18)。奥書によると、浪花の梅原新七という絵師が手がけたものである。後見返しにある目録<sup>28)</sup>には、本書のほかに『欄間図式』や『蒔絵大全』といった書名が並んでおり、各種工芸における絵手本の一種として刊行されたものであったことがわかる。肉筆雛形本制作の上では、絵手本を中心に幅広いジャンルの板本がデザインソースとして活用された<sup>29)</sup>。本書も、肉筆雛形本制作及び呉服制作の上で活用されたうちの一書であったと考えられる。

#### (19)『新形小紋帳』

1824(文政7)年に刊行された中本の判型の一書。表紙は横刷毛目の紙(渋引き紙か)に型押しで模様を表している。表紙左に貼付された題箋は剥落が激しいが、「新形小紋帳 全」の文字が読み取れる。また、千總商店の管理ラベルが貼付されるほか、「第九百〇四号」と墨書きされている。裏表紙には朱で打ち消し線が引かれた「己明治貳巳五月吉日 長谷川利右衛門」の墨書きがあるほか、千總印Aが捺されている(図



(左) 図19-1 『新形小紋帳』



(右) 図19-2 『新形小紋帳』裏表紙

19-2)。(2)『梅印御召惣模様新雛形』の墨書にあった「長谷河小店」と同一の業者であろうか。

本文は28丁からなる。末尾に紺屋と思しき人物の絵が描かれており、そこに残る「前ほくさゝゐ一筆」の署名から、浮世絵師の葛飾北斎が手がけた書であることがわかる。「小紋帳」という書名からうかがえるように、染織品向けの模様とその描き方について記されている(図19-1)。(18)『諸家地紋式』と同様に、肉筆雛形本制作及び呉服制作の上で活用された板本のうちの一書であったと考えられる。

#### (20)『諸職必用紋切形』

1848(弘化5)年に刊行された中本の判型の一書。表紙は藍色で、型押しによって模様を表している。表紙左に「諸職必用紋切形」と書かれた題箋が貼付されている。また、千總商店の管理ラベルが貼付されるほか、「第九〇一号」と朱書きされている。裏表紙には、朱で打ち消し線が引かれた「文久元年 長谷川利右衛門 西霜月吉日」の墨書きがあるほか、千總印Aが捺されている。

本文は31丁からなる。浮世絵師の溪斎英泉が編集したもので、地紋割、紋割方の秘伝、紋形切様の秘伝、絵の具大概といった項目があり、工芸から絵画に至るまで実用できる汎用性の高い内容が記されている(図20)。「地紋割」の項目の最後に記されている「紋を誂或ハ請取心得」と題された文章には、紋の受注に際して「念に念を入れて注文をきくべきなり」と記されている点が興味深い。呉服商や染屋といった業者が本書の読者として想定されていたことがわかる。



図20 『諸職必用紋切形』

#### (21)『模様紋帳諸職雛形』

1881(明治14)年に刊行された中本の判型の一書。藍色の表紙左に「模様紋帳諸職雛形 完」と書かれた題箋が貼付されている。また、千總商店の管理ラベル及び千總での管理用と思しき号数・冊数の墨書が確認できるほか、「京都市 西村総左衛門所蔵」と墨書きされている。前見返しに「西村総左衛門所蔵」、裏表紙に「京都市御倉町 西村総左衛門 蔵」の墨書がある。

本文は36丁からなる。画者は不明であるが、染織品向けの模様や紋とその描き方について記されており、(20)『諸職必用紋切形』と共通する内容も多い(図21)。業者に実用された書であると考えられる。



図21 『模様紋帳諸職雛形』

#### まとめ

本調査では、肉筆小袖雛形類14点と、これに関連するそのほかの資料7点の計21点を調査した。

町人女性向けに制作された肉筆雛形本は、その出現期となる江戸時代、18世紀半ばに制作されたものから、消失期となる明治時代中期、19世紀前半に制作されたものまで、さまざまな時代の資料を網羅しており、その時代的変遷を窺い知ることができた。特に、肉筆雛形本の中では早い時期に制作された(1)『古本墨絵雛形』及び富裕な町人女性向けに制作された(2)『梅印御召惣模様

新雛形』は、類例がわずかでありながら、小袖雛形本等の周辺資料との関係性を分析する上で重要な手がかりとなるものであった。今後、他の資料も含めた調査・研究を進めていきたい。

色見本帳は、現存遺品の中では珍しい縦長の判型を持つものであり、肉筆雛形本との関係性や、形式の時代変化に関して貴重な示唆が得られた。

肉筆の図案集については、明治時代の図案集等の出版物との関係性が示唆されるものもあり、当時の呉服業界における図案考案のプロセスの一部を窺い知ることができた。

板本の絵手本類については、所蔵を示す墨書等の痕跡により、業者がこうした板本を呉服制作における参考としていたことが裏付けられた。

本調査の結果、肉筆小袖雛形類とその周辺資料との関係性を明らかにする上での貴重な手がかりを多く得ることができた。収録された模様が類似しているなど、本学博物館の所蔵品の制作背景に関係する資料も多数確認できた。本調査の結果を土台として、小袖雛形類に関する研究及び江戸時代後期から明治時代中期に至る本学博物館の所蔵品について、今後の研究を深めていく所存である。

## 謝辞

本論文は2024年8月6日（火）及び7日（水）に千總文化研究所において、同研究所研究員の林春名氏とともにおこなった(株)千總ホールディングス所蔵の肉筆小袖雛形類の調査報告書です。同研究所のご厚意により貴重な調査の機会が得られましたこと、また、林氏には、調査に際する様々なご対応や、資料及び千總に関する様々な情報をご教示いただきましたことにつき、厚く御礼申し上げます。

また、本研究を行うにあたり、長崎巖名誉館長には終始にわたりご指導、ご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

本研究はJSPS 科研費 JP24K22449 の助成を受け、行ったものです。

## 図表出典

図 1-2 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/1900221/1/11>)

尚書堂による明治期の復刻版だが、模様図は江戸期の初版と相違ない。

図 1-4 立命館大学 ARC 古典籍ポータルデータベース

(<https://www.dh-jac.net/db1/books/arcBK01-0155/portal/>)

当該データベース上の資料名は『雛形天の橋立』となっているが、実際の資料は『雛形鶴の声』である。

図 2-4 共立女子大学博物館

図 2-5 共立女子大学博物館

図 11-1 共立女子大学博物館

図 11-3 竹本春二氏撮影

図 12-2 The Met Collection (<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/57830>)

図 12-4 筆者撮影

図 13-2 ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

図 14-3 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/13176082/1/26>)

図 14-4 共立女子大学博物館

表 1 筆者作成

表 2 筆者作成

## 注

- 1) 一般社団法人千總文化研究所編、2024 年
- 2) 調査についての詳細は長崎巖「徳島城博物館所蔵・蜂須賀家伝来染織品調査報告」『共立女子大学博物館年報・紀要』第 7 号、2024 年、p.21-50 を参照。
- 3) 凡例 5 の記述については以下の文献を参考とした。井上宗雄ほか編『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店、1999 年。橋口侯之介『千年生きる書物の世界 和本入門』平凡社、2005 年。中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』岩波書店、2015 年。国文学研究資料館通常展示「和書のさまざま」図録、2018 年。

- 4) 大本の判型には若干のばらつきがあり、縦は 28 ～ 25.5cm、横は 19.6 ～ 17.7cm の幅がある。概ね江戸初期では大きく、幕末になるに従って小さくなる傾向がある。
- 5) 丸山伸彦『江戸モードの誕生—文様の流行とスター絵師』角川選書、2008 年、p.135
- 6) 千總の組織体制の変遷については、「資料編 12 代西村總左衛門の略年譜」『千總文化研究所年報』第 5 号、2024 年、p.34-47 及び「千總のあゆみ」千總公式 HP (<https://www.chiso.co.jp/about/history/>) (2025 年 1 月 26 日最終閲覧) を参考とした。
- 7) 林春名「近代の千總における参考資料収集」『千總文化研究所年報』第 5 号、2024 年、p.48
- 8) 長崎巖「江戸時代における呉服注文の具体的プロセスに関する研究」『共立女子大学家政学部紀要』63 巻、2017 年、p.37-72
- 9) 拙稿「江戸時代後期町人女性の呉服注文プロセスにおける肉筆雛形本の出現過程に関する一試論—福井県文書館所蔵吉川充雄家文書に含まれる呉服注文関係文書を手掛かりに—」服飾文化学会編『服飾学研究』Vol.7、2025 年 3 月発刊予定
- 10) 櫻木英里子「明治期のきもの雛形本に関する一考察—発生と実態の背景—」『服飾文化学会誌〈論文編〉』Vol.15 No. 1、2014 年、p.1-11
- 11) 前掲「江戸時代における呉服注文の具体的プロセスに関する研究」p.51
- 12) 同様の特徴を示す資料として、福井県文書館の吉川充雄家文書に含まれる『(和服柄画集)』などが挙げられる。このような最初期の肉筆雛形本の出現経緯に関する詳細は前掲の拙稿「江戸時代後期町人女性の呉服注文プロセスにおける肉筆雛形本の出現過程に関する一試論」を参照されたい。
- 13) 長崎巖『ようこそきもの世界へ』東京美術、2020 年、p.68
- 14) 前掲「近代の千總における参考資料収集」p.52
- 15) 前掲『ようこそきもの世界へ』p.60-67
- 16) 水上嘉代子「田安德川家伝来肉筆衣装雛形に関する一考察」東京国立博物館編『Museum』No.628、2010 年、p.31 にこうした墨印の例が掲載されている。
- 17) 長崎巖「近世・近代の子供用衣服（一つ身・四つ身）に関する染織文化史的研究」『共立女子大学・共立女子短期大学 総合文化研究所紀要』第 28 号、2022 年、p.30
- 18) 長崎巖『きものと裂のことば案内』小学館、2005 年、p.81
- 19) 前掲「徳島城博物館所蔵・蜂須賀家伝来染織品調査報告」p.43
- 20) 前掲「田安德川家伝来肉筆衣装雛形に関する一考察」p.41
- 21) 友禪染の技法を用いて着物の模様を原寸大に表現した裂を貼り込んだ見本帳。友禪染に加えて刺繍を施すものもある。墨書などの痕跡から、肉筆雛形本や色見本帳と同様に、呉服注文に際する見本として用いられていたと考えられるものである。
- 22) 明治時代中期には、着物をはじめとする工芸意匠において、モチーフを写生的に表そうとする動きが生じていた。長崎巖「近代女性着物における洋花模様流行の実態とその文化史的意義」『共立女子大学・共立女子短期大学 総合文化研究所紀要』第 29 号、2023 年、p.17
- 23) 前掲「資料編 12 代西村總左衛門の略年譜」及び小田桃子「12 代西村總左衛門の略歴」『千總文化研究所年報』第 5 号、2024 年、p.30
- 24) 明治 10 年代以降には、友禪染工場を御倉町に創業したほか、博覧会での出品及び受賞が相次いでいる。前掲「資料編 12 代西村總左衛門の略年譜」p.35
- 25) 丸塚花奈子「江戸時代後期・明治時代の色見本帳に関する分析的研究」『共立女子大学家政学部紀要』第 66 号、2020 年、p.23-35
- 26) 前掲「明治期きもの雛形本に関する一考察—発生と実態の背景—」p.5
- 27) 前掲「近代の千總における参考資料収集」p.51
- 28) 江戸時代の出版物には、これから出版される書物の予告や、版元が板本を所有している（＝版權を所有している）書物の目録が広告として付随していることがある。
- 29) 前掲「江戸時代後期町人女性の呉服注文プロセスにおける肉筆雛形本の出現過程に関する一試論」

## Costumes handed down through the Yatsushiro Matsui family – Regarding the donations in 2023 –

Nagasaki Iwao

[Abstract]

In 2023, a total of 12 pieces of costumes made in the Edo period were donated to our museum. These are costumes for men and women of the feudal lord class, said to have been handed down by the Matsui family of the Yatsushiro clan of Higo, and are in very good condition. They are also valuable pieces whose origins are believable. Our museum has a relatively large collection of costume for men and women of the feudal lord class, but none of them reveal their origins. The 12 pieces donated this time are thought to be part of a series of costumes handed down by the Matsui family of the Yatsushiro clan held at the Mirainomori Museum of the Yatsushiro Municipal Museum, and by observing these together, we can learn about the actual state of costume for feudal lords in the late Edo period, which is very important.

In this paper, I will first introduce the details of the costumes handed down by the Matsui family of the Yatsushiro clan that was donated, in order of men and women, and then, together with the collection of the Mirainomori Museum of the Yatsushiro Municipal Museum, we will provide an overview of the entire picture of the women's clothing handed down by the Matsui family of the Yatsushiro clan, analyze the contents, and aim to grasp the actual state of the clothing life of feudal lord women in the Edo period.

## Survey Report on Hand-drawn Kosode Hinagata and Related Materials Owned by CHISO Holdings Co., Ltd.

Ishihara Hinano

[Abstract]

On August 6th (Tuesday) and 7th (Wednesday), 2024, a survey of 21 hand-drawn kosode hinagata and related materials owned by CHISO Holdings Co., Ltd. was conducted at the Institute of Chiso Arts and Culture. Most of the surveyed materials were sample books for townswomen ordering kimonos, including 13 hand-drawn hinagatabon from the Edo to Meiji periods, and a color sample book used in conjunction with these hindagatabon. The other items were one hand-drawn hinagata that samurai women used in the Edo period, two hand-drawn collections of designs produced in the Meiji period, and four publications that kimono makers may have referred to for kimono production. As a result, we have obtained many valuable clues in clarifying the relationship between hand-drawn hinagatabon and their surrounding materials.